

文章の基本的な構成をとらえさせ、書く力を高める指導

～第3学年 国語科説明文の授業を通して～

長岡市立脇野町小学校
教諭 和田 哲哉

1 目指す子どもの姿と指導の構想

平成23年度新潟県小学校教育研究会学習指導改善調査の国語科の結果分析では、第4学年の「段落を意識して記述する力」や第5・6学年の「段落を構成する力」を高める必要があることが指摘されている。

段落を意識して書く力をつけるために、第3学年では、説明文を読んで「序論・本論・結論」の三部構成をつかむ力や本論を意味段落に分ける力を身に付け、そのことを文章を書く際に活用できるようにすることが必要だと考えた。

文章の三部構成をつかむ力や本論を意味段落に分ける力をつけるために、筑波大学附属小学校の二瓶教諭が実践している「家」の図を、年間を通して用いることにした。学級では「説明文の家」と呼んでいるこの図は、いくつかの観点から「家」を部屋に分けていくことで、説明文の構成を視覚的につかむことができるようにするものである。年間を通して、以下のような段階で指導することにした。

	ねらい	扱う教材文
第1段階	1年生の教材文と「説明文の家」で説明文のしくみを知る	『いろいろなふね』（東京書籍1年）
第2段階	文章のしくみを自分で「説明文の家」にまとめられるようになる	『にせてだます』『合図としるし』（ともに学校図書3年上）
第3段階	「説明文の家」を手掛かりに教材文と類似の説明文を書く	『ミラクルミルク』（学校図書3年下）

説明文の構成を繰り返し図にまとめることで、説明文の基本的な構成を理解させ、それをもとに同じ構成の文章をまねて書く経験を通して、段落を意識して書く力を身に付けさせていくことを目指した。

2 実践の概要

【実践1】1年生の教材文と「説明文の家」で説明文のしくみを知る

第3学年の説明文を学習する前に、「いろいろなふね」を用いて説明文のしくみを学習した。

「大部屋」は「序論＝はじめ」「本論＝なか（説明）」「結論＝おわり」という説明文の三部構成を示している。「小部屋」は「なか（説明）」を意味段落に分けたものである。下段では「はじめ」「おわり」の性格を押さえ、小部屋には叙述内容を一文でまとめた「名前」を付ける。

およそ2時間をかけて図1のような「家」を完成させた。すっきりと

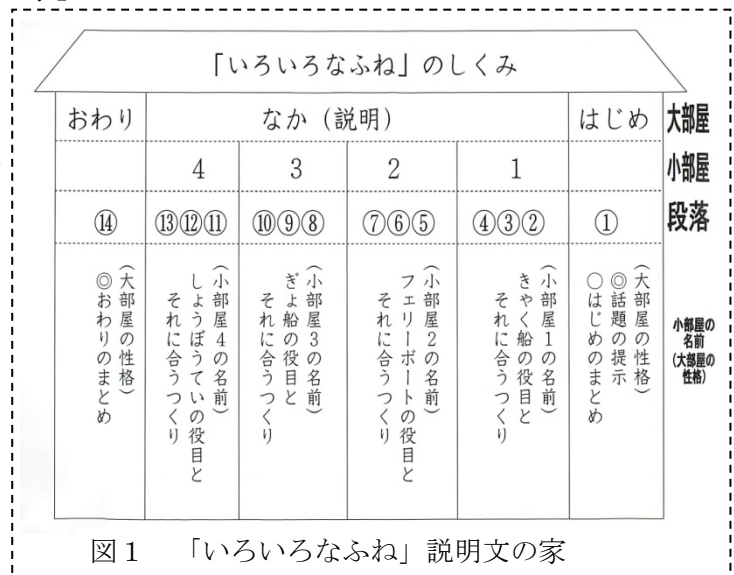


図1 「いろいろなふね」説明文の家

三部構成に分かれ、名前を付けると「なか」もきれいな並列関係になっていることが分かり、子どもたちはこの「家」をととても気に入っていた。見ただけでわかりやすいことに加え、「はじめ」「部屋」など簡単な言葉を用いたことが児童の理解を助けていた。

【実践2】「家」の図を用いて説明文の構成をとらえて要点をまとめる

(1) 「にせてだます」の授業

教科書（学校図書3年上）では、1学期前半に「にせてだます」「合図としるし」という2つの説明文教材が連続して登場する。

「にせてだます」は見開き2ページにおさまる短い教材文で、めあては「まとまりに気をつけて、大事なことを読み取ろう。」である。「家」を用いて段落の分け方を検討することと、分けた意味段落ごとの要点を自分の言葉でまとめることを主な学習内容とした。

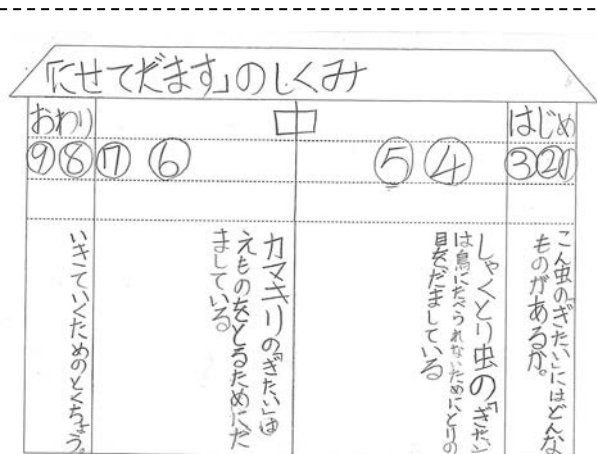


図2 「にせてだます」説明文の家（児童A）

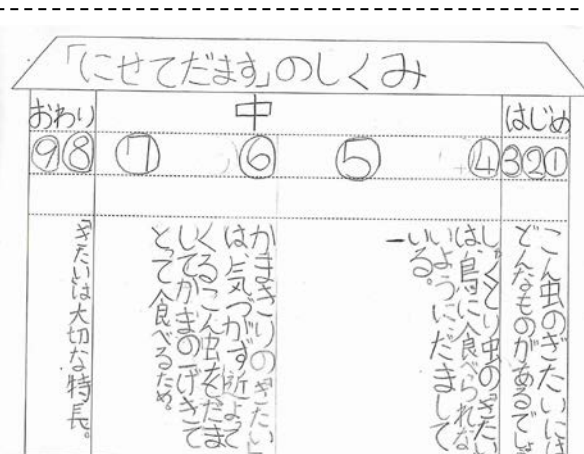


図3 「にせてだます」説明文の家（児童B）

「なか」は並列の2つの例示になっていて、児童は2つの意味段落に分けられることにすぐに気付いた。全文を通してのキーワードである「ぎたい（擬態）」を押しえた上で、この語を用いて2つの意味段落を一文でまとめることを課題とした。児童A（図2）児童B（図3）ともに、「なか」の2つの意味段落がどちらも「〇〇のぎたい」について説明した並列の関係になっていることに気付き、「〇〇のぎたいは～」とまとめていた。他のほとんどの児童も同様にまとめることができた。「はじめ」にある重要な問いの文と、「なか」の2つの意味段落をまとめたそれぞれの文、「おわり」に出てくるまとめの文とを合わせると、説明文の全体がつかめることを確認することができた。

(2) 「合図としるし」の授業～自信をもって「家」づくりに取り組む子どもたち～

「合図としるし」のめあては「キーワードに気をつけて、大事なことを読み取ろう。」とした。「にせてだます」より長い6ページにわたる教材文だが、「にせてだます」と同様、「なか」が並列関係の例示となっていて構成がとらえやすい教材文である。「家」を用いて「大部屋」と「小部屋」の構成を自分で分けることと、「なか」の4つの意味段落の要点を自分の言葉でまとめることを主な学習内容とした。

「家」を用いる学習が3回目になるので、「そろそろ自分で『家』を作れるかな。」と児童に問いかけると「できるかも。」「できるできる。」と「家」を作ることに前向きに取り組んでいた。児童は自力で3つの「大部屋」に分けることや「なか」を細分化することに躊躇なく取り組んでいた。学習の流れがパターン化してきたこともあり、下位の児童も自信をもって取り組み、ほぼ全員が自力で部屋分けをすることができた。

「なか」の意味段落を4つに分ける場面でも「もう分かった。」の声や、なんとかできそうという表情をした子が多かった。

分け方についての混乱はほとんどなく、分けた根拠を聞くと、それぞれに『音』とか『色』ごとに分けられる。」とキーワードの存在を根拠にしていたり、「それぞれ最後の段落が『このように』で終わっている。」ということに気付いたりしていた。どの意味段落も「例示→『これらは～』（詳しい説明）→『このように～』（はたらき・まとめ）」という流れになっていることも児童の考えとして取り上げることができた。

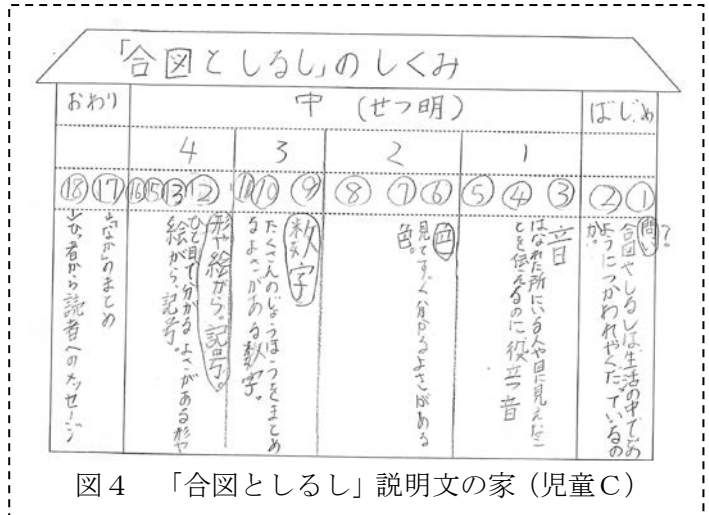


図4 「合図としるし」説明文の家 (児童C)

「部屋分けは簡単だ。」という声が聞かれ、自力で完成できたことへの達成感が大きい様子だった。また、図4のようにすっきりとしたしくみで構成されていることも実感できた様子だった。

意味段落の要点を一文で書く際は、3つのポイントを指導した。

- 1、3つの形式段落の中から一番重要な段落を選び、そこを一文にまとめる。
- 2、キーワードを必ず入れ、そのキーワードで終わるような文にする。
- 3、4つの名前は「きょうだい」のように似たものにする。

児童が一番迷ったのが1つ目のポイントだった。まとめの段落を選ぶ子が多かったが、他の2つの段落を選ぶ子もそれぞれ少なからずいた。「このように」という接続詞に注目させることに加え、まとめの段落が「どのように役立っているか」という問いを受けて「～というよさがある。」とまとめていることに着目させることで、まとめの段落をもとに一文にまとめることを理解させることができた。

【実践3】自分でまとめた構成図をもとに類似の説明文を書く

10月に学習する教材文「ミラクルミルク」では、これまでと同様に「家」を用いて構成を整理し意味段落ごとの要点をまとめることに加え、「家」の図を手掛かりにしながら「ミラクルミルク」と類似の説明文を書くことを学習内容とした。

まず、「説明文の家」の図を用いて文章の三部構成と3つの意味段落を確認し、意味段落ごとの要点をまとめた。(図5) 児童と検討した結果、今回は「はじめ」と別に独立した「問い」の部屋を作った方がよいということになった。

続いて、「ミラクルミルク」でまとめた「説明文の家」を手掛かりにしながら、類似の説明文を書くことに取り組んだ。「説明文『ミラクル大豆』を書いてみよう。」と投げかけ、大豆の変身が分かる資料(資料1)と、説明文を書くためのワークシート(資料2)を与えた。3年生という段階を考え、ワークシートは空欄にキーワードを埋めていく穴埋め形式を主とし、一部分を自力で構成するものにした。

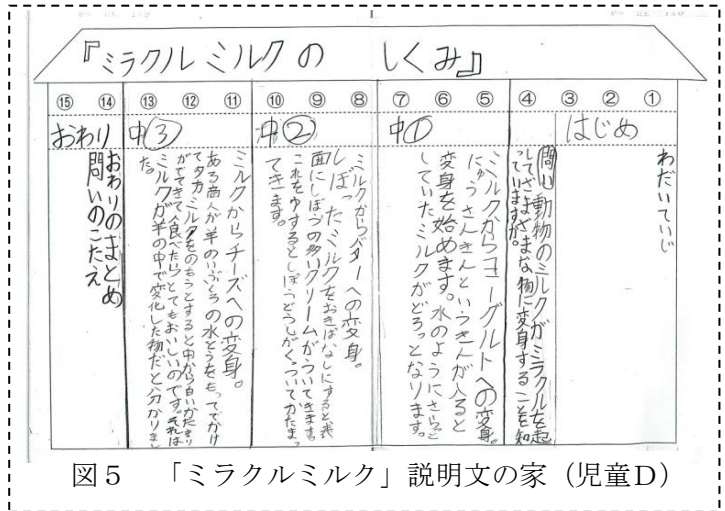
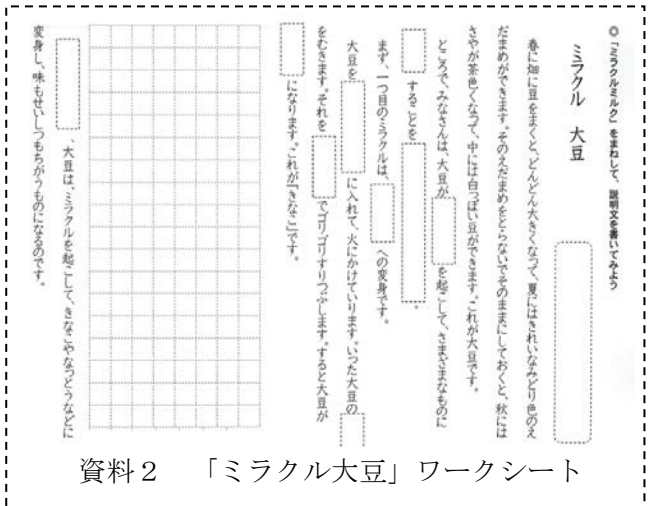
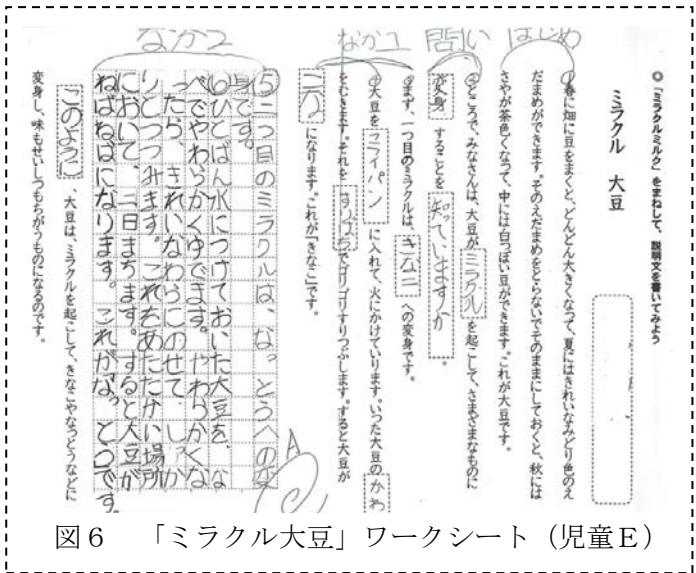


図5 「ミラクルミルク」説明文の家 (児童D)



ワークシートを与えた後、「ミラクルミルク」の「家」を手掛かりに、どの段落が「家」のどの部分にあたるかを考えさせた。ワークシートと文章を比較することで、ワークシートの文章にも「はじめ」と「問い」、「おわり」があり、「なか」は2つで構成されていることをすぐにつかむことができた。文章の基本的な構成をつかむ力が身に付いてきたことを実感することができた。空欄も、資料を根拠に自力で埋めることができた。

自力で構成することを目指した「なか2」は、何が変身するかを述べる段落と、変身の詳細を説明する段落の2つでできている。2段落で書くことを児童は理解し、1段落目は「なか1」や教材文をまねて書くことができた。だが、4つの写真をもとに5文で書く2段落目は、図6のように「これを」や「すると」という語で文をつなげることが難しい児童が多く、一度全体指導で文の数や接続語を確認した後、もう一度書き直して完成させた。



3 まとめ

今回の実践では、「家」づくりを通して基本的な構成を「自分のもの＝活用できるもの」にすることを目指した。三部構成を見つれたり本論を細分化したりする力の高まりは、繰り返し「家」づくりをする中で十分に見取ることができた。この力は、「ミラクル大豆」のワークシートを書く際にも生かされており、理解した基本的な構成を活用できるようになってきた。今年度のCRT学力検査でも「説明的な文章を読むこと」の全国比得点が126と、力の高まりを確認することができた。

書くことについては、「ミラクル大豆」のようにキーワードを埋めたり一部分を自力で構成したりする形式から、少しずつ児童が自分で書く部分を増やし、最終的に自力で文章全体を構成する方向にシフトしていくことで、今後その力を高めていくことができると考えている。

<参考文献>

二瓶弘行『二瓶弘行の説明文一日講座』文溪堂 2010
 二瓶弘行『二瓶弘行の国語授業のつくり方』東洋館出版社 2011